

ヒト IgG サブクラスモノクローナル抗体と室温で混合, これを予めヒト Ig を固着させた96穴 ELISA 用プレートに分注し, 4°C 30分静置する. 洗浄後 HRP 標識抗マウス Ig 抗体を加えた後基質と反応させ, ELISA Analyser で OD 490nm の吸光度を測定する精製ヒト骨髄腫蛋白を用いて標準検査曲線を作成し, それより測定値を換算する. 測定感度は IgG1 0.04~0.15 μ g/ml, IgG3 0.015~0.05 μ g/ml IgG4 0.1~1 μ g/ml だが, IgG2は0.3~10 μ g/ml で非希釈唾液での測定は不可能であった. ギラン・バレー症候群5例では IgG3が高値と低値の2群に別れる傾向があった. 多発性硬化症1例の6回の再発時の検討では IgG1がいずれも高値を示した.

6. 女子大生216名における血清抗核抗体陽性率

(皮膚科) 西本 直子・尾立 冬樹・
岡村理栄子・肥田野 信

本学学生6年生, 5年生の内20~25歳216名における抗核抗体陽性率を検討した.

検査は SRL に依頼した. 結果は, 6年生109名中8名(7.4%), 5年生107名中7名(6.5%)が陽性であった. 偽陽性者(10倍)も含めると, 6年生で23.9%, 5年生で20.5%となる. これら陽性者について, 診察と抗核抗体の再検及び他の血液検査を施行したが, 家族歴で膠原病患者はなく, 現時点で膠原病を疑わせるような症状を伴っている者はなく, 全員健康とみなされた. 従ってこの陽性率は, 本邦の20歳台前半における正常女性の抗核抗体陽性率とみてよいと思われた. ただし, 学生の陽性者13名中3名が蕁麻疹とかかわっているという事実は, 当科蕁麻疹患者の11.3%が抗核抗体陽性であったことと合わせて, 興味を引いた.

7. 早期胃癌に対する術前経内視鏡的 OK-432腫瘍内投与に関する検討

(第2病院・外科)

勝部 隆男・小川 健治・
矢川 裕一・榊原 宣

われわれは胃癌に対する免疫療法の工夫として, 早期胃癌を対象に術前経内視鏡的 OK-432腫瘍内投与を行なっている. 細胞性免疫能の変動をみると, 非投与群では術後有意の低下をみたが, 投与群では有意差をみなかった. 所属リンパ節の抗腫瘍的な免疫反応についてみると, 投与群では非投与群にくらべ, PHA リンパ球幼若化反応, NK 細胞活性が上昇していた. 以上の成績より, 早期胃癌における術前経内視鏡的 OK-432腫瘍内投与は, 手術侵襲などに起因する非特異的な術後の細胞性免疫能低下を防止する効果, 所属リンパ節

の抗腫瘍的な免疫反応を増強する効果があると思われた.

8. 肝腫瘍患者における経肝動脈的 LAK 注入療法の試み

(消化器内科)

小松 達司・山内 克巳・長谷川 潔・
古川 隆二・中西 敏己・新見 晶子・
上野 恵子・磯部 義憲・小幡 裕

(消化器外科) 武藤 晴臣・次田 正
(輸血部)

田中 茂治・長田 広司・清水 勝

Adoptive immunotherapy は, In vitro で自己リンパ球に Interleukin-2 (IL-2) を加えて培養して誘導した Lymphokine-activated killer (LAK) 細胞を再び体内に戻すことにより, 自己癌の発育を押えるという新しい免疫療法である. われわれは, 他の治療が施行不可能な癌患者8例(肝細胞癌5例, 転移性肝癌2例, 癌性腹膜炎1例)に対し, Adoptive immunotherapy を試みた. 末梢血採取あるいは Leukapheresis によって得られたリンパ球から LAK 細胞を誘導し, 肝内腫瘍の栄養血管に留置したカテーテルから LAK 細胞と IL-2 を注入した. 肝細胞癌5例中4例に AFP の低下を認め, 1例では腫瘍の明らかな縮小がみられた. 他の2例は, 腫瘍の内部構造に変化を認めた. 転移性肝癌2例は, 腫瘍の増大傾向は認められなかった. 重篤な副作用は少なく, 今後, 癌に対する有効な内科的治療法となりうると思われるが, その適応, 投与方法, 治療期間など, 十分な検討が必要と思われる.

9. 正常リンパ球・単球に対する LAK 活性

(第1内科)

押味 和夫・斎藤 博・溝口 秀昭

Lymphokine-activated killer (LAK)細胞は, interleukin-2 (IL-2) により活性化されるリンパ球で, 患者腫瘍細胞に対し強いキラー活性を有しているが, 我々は LAK が自己の正常細胞を障害することを見出したので報告する. 方法: IL-2 1,000u/ml で5日間培養した末梢血単核細胞をエフェクター細胞とし, 種々の単核細胞サブセットを標的細胞として, 5時間の⁵¹Cr 放出試験で LAK 活性を測定した. 全単核細胞, Tリンパ球, Bリンパ球, 単球, large granular lymphocyte に対する LAK 活性はエフェクター対標的細胞比80:1で, 各々14%, 13%, 18%, 21%, 0%で, Bリンパ球と単球が障害されやすい. PHA 刺激リンパ芽球や staphylococcus aureus Cowan I 刺激 Bリンパ球の感受性も非刺激リンパ球と差を認めなかった. Panning